

論文の内容の要旨

論文題目 都市空間における連続的風景の構造
ーイタリア・ヴィラと現代都市の横断的スケールによる空間統合ー

氏 名 大島 碧

本研究では、現代都市のシークエンスを再構成するための方法論に焦点を当て、イタリアのヴィラにおける建築・都市・領域のスケール横断的統合手法「インテグラツィオーネ・シェニカ（風景の統合）」の分析とその実験的検証を行っている。

本論の構成について述べる。

ヴィラによってとらえられたコスモスとしてのイタリア都市空間に対して、現代の東京は全体をまとめるロジックがつかみどころなく拡がっている。したがって、ふたつの都市空間に対して異なるアプローチで分析している。ヴィラにおけるシークエンス構成手法を東京に適用するにあたり、まず、第一部では、ヴィラでは文献と現地調査をもとにした定性的な分析を行い、「風景の統合」の背景と構造の解明およびシークエンスの表記方法の検討を行う。次に、第二部において、定量的な分析によって現代の東京の都市風景に内在する論理を明らかにする。その上で、両者の類似性および共通性について整理を行い、「風景の統合」の適用を試みる。

序章では、先行研究およびこれをふまえた研究目的について述べた。K. Lynchの示唆した、時間的なシークエンスに沿って連結されたイメージおよび大都市地域の構造化について述べ、その後、D. Appleyardのランドマーク研究と尺度による評価方法やG. Cullenによるシリアル・ヴィジョンなど、既往の都市シークエンスに関する研究についてまとめた。さらに、P. Thielによって歩行者の空間体験を設計者と体験者が広く共有するフォーマットとしての時間軸に沿った表記の方法について述べた。これらをふまえ、大都市空間におけるシークエンスによる構造化の手

法として、P. Van der Reeらが論じた「風景の統合」理論の都市空間への応用可能性について述べた。

2章では、P. Van der Reeらによる「風景の統合」の概念整理および、「風景の統合」の拠点となったトスカーナおよびローマ地域について、都市構造とヴィラの構成の関係を論じた。まず、都市への眼差しが構造化された背景として、都市とヴィラを往復する古代生活様式であるヴィレツジャトゥーラ、風景が“paessagio”でなく“scena”として建築家によって設計される舞台装置のひとつとして取り込まれたこと、プロポーションやパースペクティブの概念の導入などの背景について整理した。それぞれの都市については、「風景の統合」手法は、フィレンツェでは都市の基準点であるブルネレスキのクーポラを中心とし、アルノの谷をはさんだヴィラ同士の相互視認性のなかで形成され、いっぽうローマではバロック的都市構造による軸線に影響される形で発展していることを指摘した。

3章では、「風景の統合」の理論分析を行った。『イタリアのヴィラと庭園』に挙げられたヴィラのうち、「風景の統合」の手法のみられるトスカーナおよびローマのルネサンス・マニエリスム期ヴィラ24例について、分析を行った。トスカーナのヴィラ9カ所から104、ローマのヴィラ15カ所から189のキーワードをそれぞれ抽出し、類型化を行った結果、「風景の統合」手法は空間の構成要素の最小単位となる24の手法（眺望・形態操作・意味論）と、これらの単位同士を関係づける13のシークエンスに関する手法の、全37の類型にまとめられた（図）。

4章では、3章にて求めた37の手法が、実際のシークエンスでどのように機能しているかを再検証する作業を行った。また、検証のフォーマットとしての時間軸に沿った表記の規則化、および、シークエンス構造については階層の整理を行い、4つの階層（シークエンス、コード、フレーズ、37の手法）を定義した。現地調査を行った5つのヴィラの形態分析および仮想のシークエンスの抽出を行い、37の手法を用いたタイムラインによる記述化を試みた。その結果、Van der Reeらの指摘した、ヴィラに共通する部分の「コード」が現地調査を行ったヴィラにもみられ、「パノラマ」と「ジャルディーノ・セグレート」について、それぞれのヴィラでの基本となるフレーズの組み合わせを抽出、パノラマについては〈軸線交差型〉〈トラックイン型〉〈立体ルート型〉〈軸線離脱型〉の4類型、ジャルディーノ・セグレートについては、二重遮蔽という共通のパターンが浮かび上がった。調査を行った一連のヴィラにおいて、「コード」「フレーズ」は「風景の統合」の最小単位としてシークエンスの中で機能し、これらは現代の都市空間にも見出すことができるとの仮説を得た。

5章では、都市シークエンス論について既往研究の整理を行った。G. Cullenによるシリアル・ヴィジョンの概念や、Appleyardによる都市の要素が「形」と「目につきやすさ」と「意味」の組み合わせにより認知されているとの指摘について述べた。こうした背景をもとに、わが国で、アイマークレコーダーによるシークエンスの定量分析が発展してきたことについて述べ、現実の都市空間において、注視対象として建物に注目し、一定時間保持した注視について都市シークエンスの考察を行った例がまだないことを指摘した。

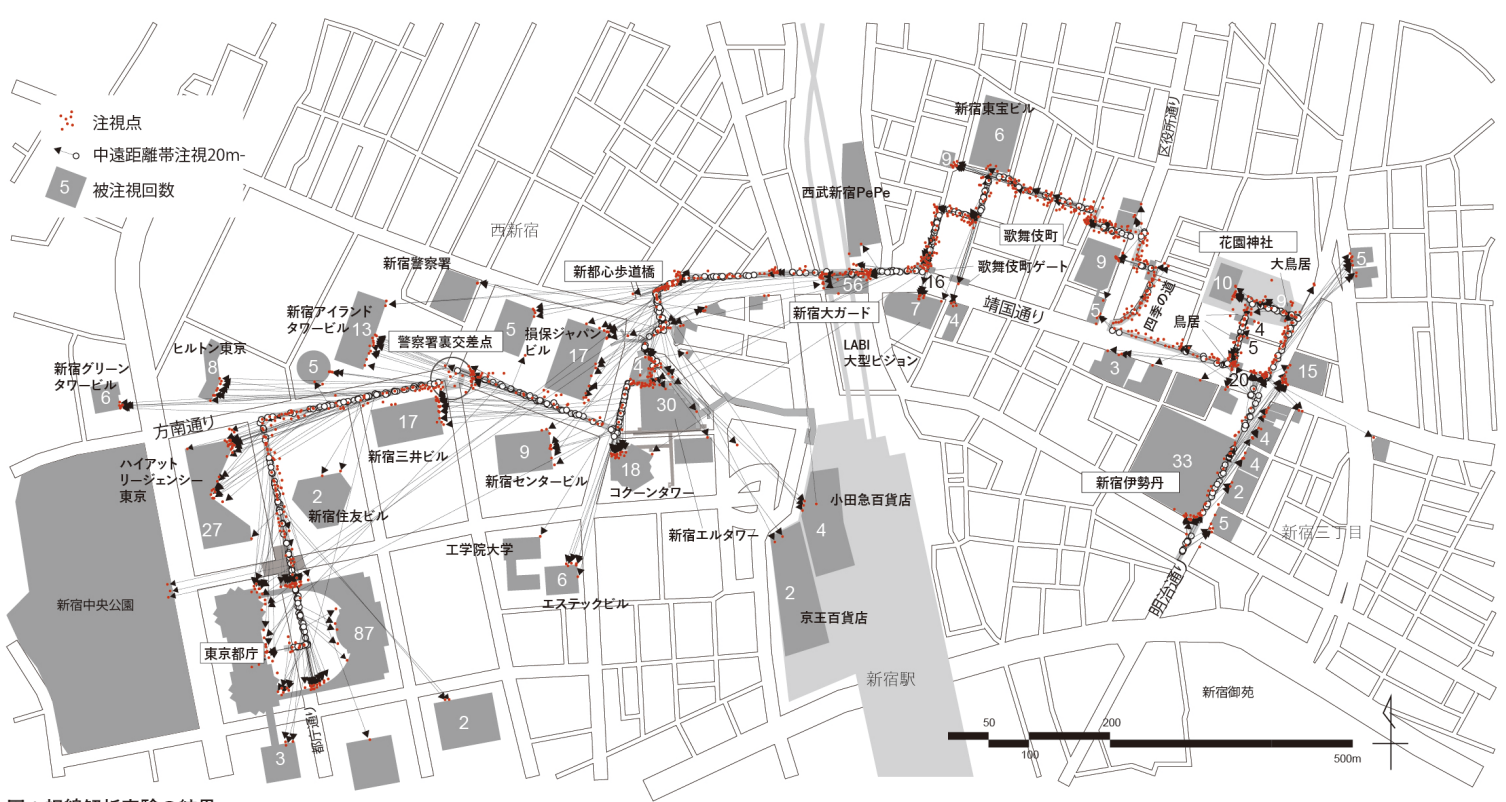
6章では、現代都市における歩行者のシークエンス体験について知見を得るために、東京の都

市地域のプロトタイプとして新宿を選定し、あるルートに沿った被験者の視線解析実験を行った。歩行者の、都市の部分に対する視線分布の傾向および遠方への注視に着目し、分析を行った。距離当たりの平均注視回数（注視回数/距離）について、細分化したルートにおけるそれぞれのパスで求め、これにより、歩行者の視線部分は道幅や街並みに影響を受けていることを明らかにした。また、局所的に視線分布の集中がみられる場所を「集中点」とし、こうした集中点には複数方向を眺められる場所と、眺められやすい対象が関係していることを指摘した。前者については都市の視点場「眺望点」とし、後者の視対象付近の注視点には「視対象型の注視点」と「通抜型の注視点」として区別し、定義した。また、Appleyardの尺度をもとに、被注視回数の多い対象を分析した結果、都市においては建物の「大きさ」や「形」以上に、「（視野の中心からの）近さ（immediacy）」つまり、歩行者との位置関係が重要であることがわかった。したがって、建物の配置にもとづくインパクトの強さ、および見られやすさを向上させる眺望のポイントが、都市のシーケンスにとって重要であることが明らかになった。

7章では、「風景の統合」手法を現代都市東京に適用するにあたり、イタリアのヴィラ・都市と東京の類似性と相違性について論じた。それぞれの都市組織・想定される注視や移動の距離・注視構造の図式より、ふたつの異なる都市領域におけるシーケンス構造について論じた。ヴィラによって統合されたイタリア都市では、風景に対し設計された眺望を向けることで、視対象としてのpaessagioを操作可能なscenicaに変換するシステムが内在している。いっぽうで東京では、イタリア都市にみられるような強い秩序はみられないが、paessagio urbanoの中に偶発的にscenaを見出すことによって「風景の統合」が起こりうることを指摘した。陣内は、現代の東京が中景のみの単調な構成になっていると論じたが、「風景の統合」を適用することにより、こうした問題は偶発的な遠方への注視がシーケンスの中で構造化されることによって解決され、都市の更新の新しい手法として有用なのではないかと考えた。

終章では、新宿における実験の歩行ルートを定義した規則によって表記し、タイムラインの中に「コード」および「フレーズ」の典型的なパターンを探った。その結果、歩行ルート内に3つのパノラマと1つのジャルディーノ・セグレートを見出した。ヴィラから導かれたこれらの「風景の統合」のフレーズと、新宿の視線解析実験における「集中点」および「眺望点」の関係についても分析を行った。その結果、フレーズやコードにはそれぞれ近景と遠景を統合するシステムが内包されていることが明らかになった。

本研究の手法によって発見された、都市の部分を相互に意識させること、また、その部分のシーケンスが「コード」や「フレーズ」として不十分な場合は欠落を何らかのかたちで補うことによって、現代都市における新たな「風景の統合」が生まれ、より豊かなシーケンス体験が喚起されると考えられる。連続的な風景の統合体として都市をとらえなおし、こうした尺度から改めて風景の評価を行い、更新のための知見を得ていくことが、これからの建築・都市にもとめられている。



図：視線解析実験の結果

表：「風景の統合」37の手法

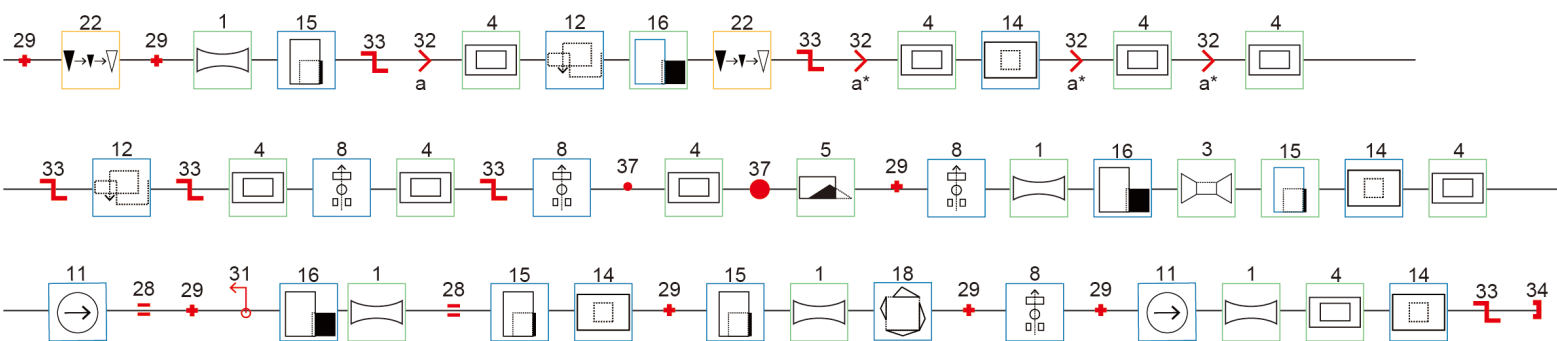
眺望	1	パノラマ	意味論	20	眺望による支配
	2	スクリーン		21	読み換え
	3	手前と奥		22	モチーフ
	4	フレーミング		23	引用
	5	絵画		24	暗示
	6	錯覚		25	コントラスト
	7	消失点の規定		26	切離
形態操作	8	軸線	シークエンス	27	グラデーション
	9	斜めの眺望		28	多層化
	10	舞台背景		29	交点・焦点
	11	方向指示		30	呼応
	12	迷路		31	振り回り
	13	幾何学		32	繰り返し
	14	内部化		33	離脱
	15	隠れ		34	終結
	16	見え		35	ループ
	17	反射		36	迂回
	18	分解		37	トラッキン
	19	取込			

表：「パノラマ」のコードの4類型

類型	定義	基本コード	ヴィラの場面の例
軸線交差型	軸線と軸線が交差し、体験者が進行方向を変更した先にパノラマが広がる	8 29 8 1 軸線 交点 軸線 パノラマ	ヴィラ・メディチ・フィエゾレ 長方形テラスからの眺め
トラッキン型	軸線の先に、風景を切り取るフレームがあり、さらにフレームの中へ進み、そこからパノラマをのぞむ	8 4 1 軸線 フレーミング トラッキン パノラマ	ヴィラ・メディチ・フィエゾレ バルヴェデーレからの眺め ロッジアからの眺め 西側テラスからの眺め
立体ルート型	軸線上に多層化されたルートの先に、今来た道を振り返るかたちでパノラマが広がる	8 28 8 1 軸線 多層化 軸線 パノラマ	ヴィラ・ファルネーゼ ヘラクレスの間からの眺め オルティ・ファルネジアーニ バルコニーからの眺め
軸線離脱型	軸線から離脱し、入口の庭と対比された森（ボスコやバルケット）の中からパノラマをのぞむ	8 33 12 25 1 軸線 離脱 コントラスト 迷路 パノラマ	ヴィラ・ジュリア バルケットからの眺め

表：「ジャルディーノ・セグレート」のコードの3類型

類型	定義	基本コード	ヴィラの場面の例
分断型	建物などにより動線を分断し、直接アクセスできない仕掛けになっている	26 15 14 16 分断 隠れ ジャルディーノ・セグレート 見え	ヴィラ・メディチ・フィエゾレ 最上段テラス
離脱・多層化型	軸線から離脱し、さらに空間を多層化させることによって、アプローチがわからない仕掛けになっている	33 28 15 14 16 離脱 多層化 隠れ ジャルディーノ・セグレート 見え	ヴィラ・ジュリア 真中・最下層の庭 オルティ・ファルネジアーニ コルドナータ上層の庭
錯覚型	錯覚により、実際に目の前にあるはずの場所が認識できない仕掛けになっている	6 15 14 16 錯覚 隠れ ジャルディーノ・セグレート 見え	カジノ・ファルネーゼ カジノの建つ台地



図：実験における歩行ルートのタイムライン記述